

〔そのとき、イエスは人々に言われた。〕「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の 때가来たからである。」

更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

-マルコ4章-

聖霊による『神の国建設』の教会

神は罪に陥る人に「懲らしめ」を与えても、見捨てることは決してなさらないお方です。神の懲らしめは、罰ではなく、すべて人を回心に導くラブコールだからです。

人類に先駆けて、「神の民」とするために養育されたイスラエルの民の歴史は、正にそんな神をわたしたちに示しています。

モーセを遣わしてエジプトから脱出させ、荒れ野での民の不信仰に、掟を与えて契約（旧約）を結び、約束の地で、安住と繁栄を得るや神への不従順の末、国を滅亡させた民に捕囚の苦役を許し、苦役が満ちた民を、神は支配者キュロスを使って祖国に帰還させ、建国を促された。その後、イスラエルは500年の間、ギリシャ、そしてローマ帝国の属国として支配される中、メシア待望を募らせま

す。

しかし、神がメシア「イエス」を遣わして実現しようとした新しい契約は、人の支配で繁栄を取り戻す世界ではなく、神の支配による「神の国」の建設だったのです。すなわち、肉を満足させる、競争と争い、武力で奪い取る、勝ち組の世界ではなく、自我に死んで、聖霊が働いて「神のみ心」が行われる共生・共有の世界でした。

導していただくために自我
終えたキリストが天に
は、聖霊の導きで「神
の国」であったこと
のです。

聖霊が導く「神の
笑に付すような、ど
いつか必ず神の国
いることを信仰者は
とがないのです。



キリストの十字架に倣って私たちが聖霊に先
に死ななければなりません。 使命を
帰り、聖霊を送って誕生させた教会
の「こころ」が実現していく「神
を私たちは忘れてはならない

こころ」は、周りの人が一
んな些細な事柄であっても、
に成長させる力が秘められて
信じて、この世で力を落とすこ